トヴァンスキの『饗宴』

——ポーランド神秘主義とナポレオン崇拝——

石塚　出穂

「赤い予言者たち」の第三の項には、「今なお神秘主義が白熱状態にある[15]」ポーランドから二人の予言者が登場する。ポーランドは1832年以来ロシアの直轄地になっていたが、皇帝ニコライ一世の専制政治を嫌った多くのポーランド人が亡命の道を選び、特にロシアと対抗関係にあったフランスには一万人を越す移民が流入したという[16]。ネルヴァルが取り上げたポーランド人予言者「ミツキェーヴィチとトヴァンスキ[17]」は、このような時代背景の中から出現したのであった。

一人目のミツキェーヴィチとは、ポーランド最大のロマン派詩人と呼ばれるアダム・ミツキェーヴィチ[18]のことである。この国民詩人は1831年のポーランド独立運動がロシア軍によって鎮圧されると亡命生活に入り、翌年には多くの同胞が身を寄せていたパリに落ち着いて、文学活動を再開している。さらに1840年にはコレージュ・ド・フランスの教授に任命され、新設されたスラヴ文学の講座を開講、名実ともにポーランド文学界の第一人者として活躍した。ラムネーに影響を及ぼした著作としてネルヴァルが“啓示の書”と呼んでいる『ポーランドの巡礼の書[19]』は1832年、詩人がパリに着いた年に発表したものである。

しかし二人目のトヴァンスキとは何者であろうか。この人物はいかなる資格において、ミツキェーヴィチと共に“赤い予言者”の一人に数えられているのだろうか。ネルヴァルは「ミツキェーヴィチとトヴァンスキ」の冒頭で、

---

15 « Les prophètes rouges », *Le diable rouge*, Aubert et Cie, 1849, p. 53
「赤い予言者たち」の序文で、ネルヴァルは、ポーランド移民がフランスにもたらした一群の予言者が、1848年の2月革命に相当な思想的影響を及ぼしたと述べている。そしてその筆頭に挙げられているのが、『ポーランドの巡礼の書』の著者ミツキェーヴィチである。

16 Stanislas Szpotanski, *Adam Mickiewicz et le romantisme*, Paris, Société d'édition « Les Belles-Lettres », s. d., p. 47

17 « Les prophètes rouges », p. 54-56 Ⅲ. Mickiewitz et Towianski
なお、この項の大部分は、ネルヴァルが1844年『アルチスト』紙に発表した記事「神秘主義的なリトグラフ」から引き写したものである。

18 Adam Mickiewicz(1798－1855) 1840年から1844年までコレージュ・ド・フランスで教鞭を執る。同僚にミシュレ、キネなどがいた。

19 *Livre des pèlerins polonais* ラムネーへの影響については« Les prophètes rouges »の第二項「ラムネー」を参照。

次のように記している。

> コレージュ・ド・フランスにおけるミツキェーヴィチの講義に関する例の審議のことは、皆さんご記憶であろう。彼はその講義で新しいスラヴの宗教を声高に説いたのであった。
>
> 新しい使徒たちの聖典は、『饗宴』と題された一冊の書物である。この本は初めのうちスラヴ語の教授の作と見なされていたが、その後アンドレ・トヴァンスキなる人物の手になる作品であることが知られるようになった[20]。

1840年に始まったミツキェーヴィチの講義は1844年、フランス政府の命令によって停止させられている。理由はネルヴァルが書いているとおり、講義の内容がスラヴ文学の研究から新興宗教の伝道へと変わったためだったが、この宗教の創始者で、当時ミツキェーヴィチの精神的指導者となっていたのが他ならぬトヴァンスキであった。

アンドレ・トヴァンスキ[21]は、意志の力と精神の完成により、祖国ポーランド、ひいては世界全体を救うことを目指した神秘主義者であった。その教義は、度重なる他国の侵略に苦しむ殉教ポーランドを諸民族の導き手とみなし、キリストのようにいつの日か復活を遂げると信じるポーランド・メシア主義の典型的な例といわれている[22]。しかしトヴァンスキのメシア主義には、フランスとの関係において、特に興味深い要素が一つ含まれている。ナポレオン崇拝がそれである。

ポーランドにおけるナポレオンは、確かにロシアやプロシアからの解放者であったが、それと同時に新たな征服者という負の側面も持っていたことも否定できない。しかしトヴァンスキの持つナポレオン像はまさしくポーランド解放の英雄としてのそれである。すなわちトヴァンスキにとってのナポレオンはポーランドと世界の救済という神の使命を帯びた先駆者であり、同志だったのである。ナポレオンは不幸にして志し半ばで斃れたが、神の正義は必ず実現されるものであり、自分こそは新たに神の命を受けてその意志を果す者だというのがトヴァンスキの信念であった。

更にこの神秘主義者にあっては、死したりといえどもナポレオンは依然と

---

20 « Les prophètes rouges », p. 54

21 André(Andrzej)Towianski(1799-1878)『19世紀ラルース』によれば、生れつき盲目であったが、ある時突然目が開いて神秘的な幻視を体験するようになり、やがてメシヤを自称するに至ったという。ただし、トヴァンスキが盲目であったという記述は他の辞書や文献には見当たらない。おそらく当時の流説なのであろう。

22 『ポーランド史』第二巻、ステファン・キュニェーヴィチ編、加藤一夫／水島孝生共訳、恒文社、1986年、p. 117

して神の僕であり、あまつさえ中断された地上での使命を霊として更に高い次元で続行しうる存在であった。「赤い予言者たち」の記述によると、トヴァンスキは 1840 年にナポレオン戦争ゆかりの地へ巡礼に出たが、この時彼はワーテルローで「未来の世界の運命に思いを巡らせ、近い将来に備えてヨーロッパの地図を作り直している偉大な皇帝の亡霊を見た23」という。

この幻視をトヴァンスキは神によるナポレオンの霊の召命と解釈した。1840 年はナポレオンの遺骸の帰還の年であったが、トヴァンスキは同年 12 月パリに赴いてナポレオンの葬儀に参列している。そして、トヴァンスキ自身の言によれば、その後まもなくナポレオンの霊を自分が神から託された大事業の同志として受け入れ、翌 1841 年 1 月 17 日には、この偉大な協力者を得たことを神に感謝し、"主の聖なる晩餐" にならって記念の式典を催したという。この神秘的な晩餐の席で行った演説の記録が、トヴァンスキの教義を伝える『饗宴』、正式には『1841 年 1 月 17 日の饗宴24』と題された書物である。冒頭の一節を引いてみよう。

> この式は神の最も大いなる栄光と、聖なる務めのふところに兄弟……を迎えた最も熱烈な神への感謝のために執り行われたものであり；これまで完全に霊界にあった行為の、外界において完成する聖なる行為への第一歩にふさわしい小さな平和な集まりによって祝われたものである25。

「兄弟」の後の人名は省略符で伏せられているが、後に続く演説の記述を検討すれば、ここにナポレオンの名が入っていたことは明らかである26。『饗宴』は前半こそ「小さな集まり」に列席している複数の「兄弟達」に神のお告げを伝え、共に神の正義を実現しようと呼びかける内容になっているが、

---

23 « Les prophètes rouges », p. 56

24 *Banquet du 17 janvier 1841*, Paris, N. Béchet fils(s. d.), 16p. 原文ポーランド語。この作品がパリで出版されるまでの経緯を要約すると次のようになる。まずトヴァンスキは『饗宴』の手稿を、ポーランド軍司令官スクシネツキに贈ったが、トヴァンスキを敵視していたポーランド人聖職者達がその写しを作って攻撃の材料にした。やがてミツキェーヴィチがコレージュ・ド・フランスの講義においてトヴァンスキ擁護の論陣を張るが、当時トヴァンスキの著作はまだ一つも出版されておらず、彼の名は一般にはまったく知られていなかった。しかしミツキェーヴィチがしばしば言及する『饗宴』の内容に触れられないのは不便だとして、聴講者向けにフランス語に翻訳したテキストが作られた。これが今回使用したベシェ書店版である。なお、ミツキェーヴィチは『饗宴』という題名を『最後の晩餐(*La Cène*)』と呼びならわしていたという。
Szpotanski,. *op. cit*., p. 72 及び *Banquet*, p. 1, « Aux auditeurs »参照。

25 *Ibid*., p. 5

26 同様の省略は『饗宴』最終ページの「第三の乾杯」にも見られる。ルイ＝フィリップ政権を憚った発行者が削除を行ったものと考えられるが詳細は不明である。いずれにせよ『饗宴』p. 15 には「御身、ナポレオンの霊よ」という呼びかけがはっきり残っている。訳文参照。

終わりに近づくにつれて、神から特別な命を受けた「兄弟」である英雄ナポレオンへの熱狂的な賛美へと変わっていく。最後の乾杯の辞に至っては、まさにナポレオンを神格化しているといっても過言ではない。ポーランド人神秘主義者の世界救済の夢が、実在したフランスの英雄を超越的存在へと変容させているのである。

さて、1841 年にパリで布教活動を始めたトヴャンスキは、そこでミツキェーヴィチなど幾人かの熱心な信者を獲得したが、翌 1842 年に早くもフランスからの退去命令を受けた。ルイ＝フィリップ政権が、その教義に大きな位置を占めるナポレオン崇拝に懸念を抱いたことが、この措置の一因とされている。トヴャンスキがフランスを去った後、今度はミツキェーヴィチがその思想の擁護と普及に努め、1843 年の末からは講義でも『饗宴』を取り上げているが、まもなくその講義が差し止め命令を受けたことは前述の通りである。このコレージュ・ド・フランス事件においても問題視されたのはおそらくナポレオン崇拝だったのだろう。ミツキェーヴィチは『饗宴』の最後の講義を、ナポレオンを称えた「乾杯の辞」の朗読と、トヴャンスキの幻視に似た、「世界地図の新しい分割線を示すナポレオン」を描いたリトグラフの配布で締めくくったという[27]。

以上、1840 年代のフランスに出現したポーランドの予言者、特にトヴャンスキの活動と、七月王政の為政者によって排斥されたその教義の特徴を概観してきたが、続いて『饗宴』本文から主としてナポレオンへの言及がある件を抜粋・翻訳して示すことにする[28]。神秘主義とナポレオン崇拝を融合させた『饗宴』の文章には不可解な点も多いが、末尾近くの「第一の乾杯の辞」などは、トヴャンスキの教義が、かなり極端な形をとってはいるものの、やはり祖国ポーランドへの愛国心に由来していることを明確に示して興味深い。

---

27 « Une lithographie mystique », *L'Artiste*, le 28 juillet 1844. 及び Szpotanski, *op. cit.*, p. 83

28 *Banquet*, p. 13-16 (p. 13-14 にかけて一部省略)

なお訳文中の下線部は本文イタリック(主として神のお告げの言葉である)、［ ］はポーランド語から仏語訳した翻訳者が「理解を容易にし、意味を定めるために」ほどこしたもの、そして || は今回使用した版のページが破れていて一部解読できない単語(完全に消えているものもある)を、筆者が文脈から推測・補足した箇所である。

1841年1月17日の饗宴

［前略］広大な神の行為においては、力はただ霊魂の中にある、そして霊魂は、その外皮の中、その地上での生においては、その力を失ってしまう；しかし人間は、団結し、強力な霊魂の柱、彼らの魂の状態に釣り合ったより明るい、あるいはより暗い柱を降り立たせることで、多くのことを成し遂げてきたし、また多くのことを成し遂げることができるということは、すでに見たとおりである：かくしてモーゼは、祈ることで、すなわち非常に強力な柱、聖なるものであるがゆえに強力な柱を呼び出すことで、助けなしには両腕を上げることもできなかったほど肉体的には力弱かったにもかかわらず、戦いの行方を指揮し続けたのであった[29]。

ただ一人の義人のために、彼の功徳のために、神は一つの国、一つの都市をお許し下さる；なぜならこの義人は、その純粋な精神によって、その国、その都市を、悪の攻撃から守る聖なる柱をもたらすからだ；反対にまさしくこのただ一人の人がいない場合、侵すことのできない構造の法則に基づいて、上位の柱は助けにやって来ることができない。

［中略］今日、神は、主の最も聖なる行為を悪の手から守るため、積極的に神に仕える明るい柱が地上に現れるように、命令を下されたのである。

これらのいとも聖なる命令をリトアニアの片隅で受けた私は、それらを御身に告げることを急いだのだ、兄弟よ、そして御身を至高なる命令の名において、かの行為へと促すことを。神が我々に、それにふさわしいだけの価値を持たない我々に、かくも偉大なる行為を、神の愛の行為を、委ねて下さった運命を詮索はするまい；神の意図を探ることはせず、ただ我々のすべての力を至高なる意志の完成のために使おう。別の時代であったら、我々は自分達を勢いづけてくれる輝きとともに修道院の壁の中に隠れることを余儀なくされたことだろう。

至高の神の恩寵が世界の嵐のただ中で我々を待っている行為へと我々を促している今日、我々は自分の内面の修道院に閉じこもらなくてはならない。それは我々を付け狙っている悪が我々の格子の後ろに侵入したり、行為を揺るがせるかもしれない暗い柱を我々にもたらしたりすることを防ぐためだ。イエス＝キリストは父として我々の守護者であり、神が地上に降ろされたすべての光の源である、そしてこの行為においては、キリストは神に次ぐ第一の推進者なのだ。その後には、偉大なる智天使たち、霊の聖なる軍隊が続く。そして我々はといえば、至高なる意志の命令により、この柱の最後の段階を形作る；我々は特にその出口にあたる、ここを通じて目に見えない神の力が地上に目に見える形で現れるのである。そして御身、ナポレオンの霊よ、御身は例外的な特権により、この聖なる柱の最後から二番目の段階にいる。御身は純粋な霊であることをやめずに、地上で生き、活動することを許されたのだ；御身は御身の地上

29 « Les prophètes rouges », p. 55 でネルヴァルが引用している件。『饗宴』前半は主としてこの「柱の教義」の開陳にあてられている。

の道具に結び付き、助けを与えることを許された、それによって御身の国が御身を認め、御身の導きに慣れ、それを渇望しているその国が主によって定められた行為を完成するために、なぜなら主がそれによってご自分の聖なる意志とご意向とを示されることを望まれたからである。神の慈悲を広める務めが我々に手によって行われるほど我々が栄光と恩寵とまで高められた時、ああ！我々は常に、完全な簡素さ、人間的なすべてのもの、すべての汚れからの解脱を心がけなくてはならない、こうした汚れはおそらくこの出口の性質なのであろうが、ごく小さな障害でさえ柱を止めてしまうことがある；なぜなら神はその特別な法を変えることはなさらないからだ。今日苦しんでいる多くの人々は、彼らの不純さによって神の恩寵の泉を止めてしまったのである。今、啓示された至高の意志によれば、ある者によって止められた {泉30} はすぐに別の者によって進められるだろう；なぜなら神の {慈悲31} の行為は完成されるべきものであるからだ、そしてこの行為は {何32} 世紀もの昔から準備されており、聖ヨハネによれば、一人のバルドによって示され、実現はその僕たちに委ねられた：上位の僕たちはこの意志を下位の者たちに示した。――私は地上でこの命令を受けた最初の者であり、同時に御身に対し、兄弟よ、主の秘密を示し、御身を神に仕える同志として迎え、兄弟に兄弟の絆を与える(聖ヨハネの命令の言葉)という至高の意志を受けた最初の者である。この命令は、12 月 24 日から 1 月 10 日にかけての 17 日間で完成され、11 日には神はご自分の意志が果されたことを明かされた。かくして今日、高きところより我々を見守っていて下さったことに対し、主に感謝の祈りを捧げた後で、取るに足らぬ存在である我々にも、我々の上に注がれた神の恩寵と慈悲とを霊として喜び合い、互いに祝い合うことが許されている。そして人間としての我々にも、霊の行為に協力したことにより、熱烈な思いをこめて、神の行為と我々の祖国の繁栄のために、杯を干すことが許されている。この種の乾杯は地上では初めてのことだ；なぜならこれまで地上にはこのような神への奉仕はなく、よってこのような乾杯もなかったからである。人間にも、霊を高めることによって、主の聖なる晩餐を新たにすることが許されていることを思い出しつつ。

第一の乾杯

神よ！地上的な形における霊の行為のこの顕示を、御身の栄光にお受け下さい：

御身の繁栄のために、御身の御名が、おお主よ、神聖なものとして崇められるために、諸民族の最も聖なる大義のために；我々の祖国の繁栄のために！

30 [sour]ce
31 [misé]ricorde
32 [des] siècles

第二の乾杯

主の慈悲、許しと安らぎ、我々との速やかな結合！おお、我々に親しい英雄の霊よ、兄弟、聖なる行為における同僚にして協力者。おお、御身、幻視者の長、地球に関する主の命令をより詳しく知る者よ！御身、20年の苦しみの後、いと高き許しによって今我々の晩餐を霊として分かち合う者よ、今こそ我々の正式な保証を受けたまえ、[そして御身をむしばむ憂いを鎮めたまえ、おお親愛なる霊よ！]、我々は、御身がより近くにいる {ところの33} 神の意志により、御身の霊 {の34} 喜びと平穏、救いのために、御身が我々に伝えてくれるだろう導きに従うように、あらゆる努力を払うであろう。

第三の乾杯

神の恩寵と恩恵により、聖なる務めのふところに入り、我々の霊を喜ばせ、我々の心を喜びで満たした、いとも親愛なる兄弟の繁栄と祝福と健康のために。……万歳35。彼が、神の御手によりその偉大なる運命の聖なる道に導かれ、平和と力のうちに歩んでいきますように。

33 d'après la volonté de Dieu, [dont] tu es plus rapproché
34 le repos et le sa[lut de] ton esprit
35 Vive..... ここでもナポレオンの名前が削除されている。注12参照。